

文部科学省補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）」

2020年度 連携型共同研究 成果報告書

研究課題名	幼稚園児・小学生の漢字教育の改善提案について
研究代表者	出野 文莉（大阪教育大学 教育学部 准教授）
共同研究者	森 久佳（大阪市立大学 文学研究科 准教授）

研究成果

本研究目的は認字（漢字をかけなくても読みと意味を認識すること）教育と、新しい漢字を教える際にその漢字の成り立ちを教えることである。コロナ禍の中で、どのように研究を進めるかについては随分と考えさせられた。模擬授業ができないので、今年度は教材開発に力を注ぐべきであろうと考えた。折しも、中国上海の華東師範大学で中国・韓国・日本で小学生の児童が習う漢字について、甲骨文・金文・小篆などをふまえて漢字の成り立ちを説明する教材をデータベースとして作成したいという意向があり、このことは本研究目的にも合致していたので、その要望を受け、日本の小学校で児童が学習する 1026 字の漢字について各々の漢字の説明とイラスト入りの教材開発に力を注いだ。華東師範大学中国文字研究與応用センターに出来上がった原稿を送ると、出版する場合に著作権に触れない甲骨文・金文・小篆を提供してくれて、大いに助かった。また、意味の分かりにくいところなどを指摘いただき、適切な訂正を行えたことも助力となった。

甲骨文や金文は漢字の識者によって認められた漢字が相違することがあり、その調整には頭を悩ました。漢字の成り立ちの説明には白川静の『字統』普及版（平凡社、2007年）や『常用字解』（平凡社、2003年）を拠り所にした。白川文字学は、漢字を系列文字という考え方があり、それを覚えることが子供たちにとっても一番優れた方法であると思ったからである。たとえば、方・放・敷・激・邊などは部首に拠らない「方」の系列文字ですべての文字に「方」の意味が貫通しているので、一度覚えると系統的に理解ができるところが他の漢字学説より抜きんでて優れている。児童たちが系列的に文字を学ぶことは大変有益だと思う。

イラストの作成は大阪教育大学美術教育専攻の学生 8 名にて描いていただいた。学生たちは漢字学に初めて接するので、最初は戸惑いもあり、たびたび訂正をお願いした。しかし、何度も作図を続けていくうちに段々要領も良くなっていった。この教材において、イラストは児童たちの各々の漢字に対するイメージを記憶にと蓄えていくために非常に重要なツールである。学生たちはコロナ禍にあって、試験やレポートなど大変忙しい生活の中で、期日までにイラストを描き上げてくれたことは感謝に堪えない。今後の模擬授業に備えて、一年生・二年生の教材（縮刷版）を各 100 冊ずつ印刷・製本した。（写真参照）

今後、進めるべき研究は認字教育のための漢字カードの制作である。それらが仕上がったら、先ず、幼稚園で模擬授業を行って、漢字の成り立ちと認字を同時に教えていきたい。認字教育については日本でも『小学生学習指導要領』の中で触れられているが、写字（書けるように覚える字）の前提として覚える意味で行われている。中国における認字教育は、写字よりもずっと多くの認字を教えている。例え書けなくても字形と意味さえ覚えていれば、文章は読めるのである。例えば「鬱」という漢字を書ける人は少ないが、見れば「鬱陶しい（うっとうしい）」や「鬱積（うっせき）」の「鬱」だと分かる人は多い。日本では、この様に多くの漢字を覚えるための認字教育をするという考えをもつ人は現在では少ないが、非常に有益な教育であると思う。将来、「漢字の成り立ち」教育とともに、認字教育を幼稚園で普及したいと考えている。一步一步漢字教育改善のための過程を歩んでいきたいと思う。

